



▲昭和34年の台風7号で増水した三矢付近の淀川。奥は先代の枚方大橋。堤防上には不安そうに川面を眺める人の姿が。



▲川の流れを改修して生まれた淀川河川公園。左奥にはスーパー堤防上に建つマンションが見えます。



▲桜町交差点付近に立つ明治18年の洪水碑。被害を風化させないよう翌19年に建てられ、平成22年、現在の位置に移されました。

恵みと水害をもたらした悠久の流れ

淀川

江戸時代には三十石船が行き交うなど枚方の発展を支えてきた淀川。一方で洪水がたびたび発生し大きな被害をもたらしました。豊臣秀吉が左岸に全長27kmの「文祿堤」を築き、明治になるとオランダ人技師の指導で工事が行われるなど、治水は大きな課題でした。明治18年には、梅雨の長雨で伊加賀を皮切りに堤防が次々と決壊し、府内で家屋の浸水7万戸、被災者30万人の大水害が発生。全国に先駆け本格的な河川の改修が進められるきっかけとなりました。

昭和初期の大雨による増水を幼い頃に経験した三矢の片山正男さん（92歳）は、「橋の上から手が届きそうなくらい水位が上がってね。家の裏手の堤防から水が染み出しました」と振り返ります。「もう決壊するぞ」という声に、近所の住民ほぼ全員が着の身着のまま、高台にある台鏡寺に避難したんですよ。幸い決壊は免れましたが、「家が流されるかもしれないという恐怖と、濁流のごう音が今も忘れられません」。

昭和63年、市街地側に堤防の高さの約30倍の幅で広範囲に盛土をして、洪水被害を小さくするスーパー堤防が全国で初めて出口地区に完成。平成9年には、枚方地区で左岸に蛇行していた流れを真っ直ぐに改修する工事が完成し、洪水の危険性は大きく下がりました。グラウンドや船着場、イベントに利用できる広場がある淀川河川公園も整備され、週末には市内外から多くの人を訪れるなど憩いの場として親しまれています。

（平成24年9月号）